

2007年 新年のあいさつ

東邦チタニウム株式会社
社長 野上一治

皆さん、新年おめでとうございます。

2007年の初めに当り、一言ご挨拶申し上げます。

東邦チタニウムグループは、2005年、2006年と好調な実績を残してきましたが、2007年もこれを持続できそうな環境が見通されます。皆さんとともにこのことを喜び、自信を持って新年に乗り出して行きたいと思っております。

本日は、2つの視点から、私の思いますことを申し上げたいと思っております。

一つは、これから我々は、まさに「第2の創業」とも言うべき局面に立ち向かっていこうとしており、そこでは、会社も個人も、さらなる「進化」を遂げていかなければならないということでもあります。

今一つは、時代を反映して、企業経営の枠組みが色々設定されるようになり、株主や社会の目が非常に厳しくなっております。そういうことに過剰に神経質になる必要はありませんが、それをしっかり受け止めることは重要なことです。それらを日々の企業活動にきちんと取り入れた会社ほど、市場には評価されます。そういう目線を持つとうということでもあります。

まず、“会社も個人も、「さらなる進化」を遂げて、「第2の創業」にチャレンジしよう”ということについて申し上げたいと思っております。

2004年から始まった急速かつ持続的なチタン需要の拡大は、我々の周りに大きな変化をもたらしました。売上や利益、特に利益が、それまでのレベルから数段高いところに引き上げられました。その過程では皆さん方の懸命の増産努力もありました。それらがうまくかみ合って、我々は今や新しいステージに立っております。

しかし、その背景では、世界のチタンを巡る事業環境に大きな変化が起きております。

その流れに乗るべく、2005年、まず我々は、北九州でのインゴットの生産能力増強を先行し、併せてこの茅ヶ崎の敷地で、2011年までに段階的に7,000tのスポンジ増産を図るという構想で走り始めました。

北九州EB工場はその線で着々と準備を進めております。

スポンジの増強も、第一段階の700t増強はすでに着手しております。

しかしながら、世界のチタン需要の拡大、それに対する内外でのスポンジ増産の動きが想定していた以上に早く、かつ多様な動きを見せています。東邦チタニウムとして、茅ヶ崎でフル生産を続けながら増産対応をしていくにはどうしても2011年までかかってしまう、しかもそれで6,000tしか増えないという事実を考えたとき、ここは思い切って、その先に想定していた新立地展開を前倒しに考える必要があると判断するに至りました。すなわち、茅ヶ崎の外に、(北九州がその有力候補地であります、)12,000t規模の新しいスポンジ工場を作り、2009年末の稼働を目指すという構想に変更いたしました。現在、3月末を目処に基本計画を纏めるべく詰めの作業を行っているところです。

北九州EB工場は、2月初めから建設部隊が現地で常駐を開始、7月からアメリカで製造中の設備が搬入され始め、年内一杯かけて据付、試運転を終わらせ、来年(2008年)の4月には営業生産に入る予定です。これと並行して新スポンジ工場の設計、建設を進め、2009年末稼働を目標にする、そういう構想です。茅ヶ崎での増強、フル生産を続けながら、これら、インゴット、スポンジの新立地生産体制を立ち上げて行くものであります。

皆さんには大変ご苦勞をおかけします。投資金額も相当な規模になります。

そして、3年後には、スポンジ生産においても本格的な2工場体制に入ります。2工場体制の運営は、我々が想定している以上に大変だと思います。単純なイメージで言えば、この茅ヶ崎のスポンジ工場と同じ規模の工場がもう一つできるわけで、それだけの人も必要になります。しかも、3年後にそうなるということではなく、今年からでも人的体制を整え始める必要があります。すでに、生産現場の皆さんには、そこに向けての助走が始まっていることを感じていただいていると思います。

チタン関連では、新製錬法開発にも積極的な取り組みを続けます。トーホーテックも新たな発展段階を睨んだ戦略をめざします。

そして、大きな節目に直面するのはチタンだけではありません。キャタリストも黒部を中心にしたTHC生産の増強路線を継続して進めます。電材は、この部門特有の厳しい環境での再構築を目指します。テスコも、新たな分野開拓にもチャレンジしつつ収益力の増大を図ります。ウィスカーは、新たな事業展開を目指すべく、いったん戦線を縮小します。一方、太陽光発電用途ポリシリコンや可視光型光触媒の新規事業にも取り組みます。

チタンの生産能力増強に止まらず、東邦チタニウムグループ全体として、こ

れから取り組もうとしているこれらのことは、いずれも、文字通り大変にチャレンジングなもので、**世界最強のチタン総合企業**を目指す編隊を構築して行くものです。

中でも、新スポンジ工場を茅ヶ崎の外に造り、本格的な2工場体制に取り組むのは、冒頭に言いましたように、まさに「**第2の創業**」とも言うべきことでもあります。

そして、併せて、すべての分野、すべてのレベルでの仕事への取り組みにおいて、TPM活動を中心にこれまで高めてきた現場力を一段と向上させていきます。ここでいう“現場”は、生産現場だけでなく、営業部門の現場、管理間接部門の現場も含みます。そういうすべての現場力の向上を私は「**進化**」と呼びたいと思います。

次に、もう一つの視点について述べたいと思います。

東邦チタニウムは、昨年9月、東証一部に昇格いたしました。

一方、近年の企業経営に対する制度的枠組みの強化もあって、特に上場企業に対する株主や社会の目が非常に厳しくなりました。ここ数年、新聞等を見ても、コーポレートガバナンス（企業統治）とか、コンプライアンス（法令遵守）とか、情報の開示責任とか、内部統制とか、CSR（企業の社会的責任）とかの用語が乱舞しています。新会社法や金融商品取引法の制定もあって、義務付けられることも増えてまいりました。いろいろ錯綜していて、非常にわかりにくく、また企業にとっては非常なコスト増をもたらすものでもあります。これらの制度的枠組みの強化が企業に求めているものは、実は当たり前のことであり、多くは格別新しいことでもありません。

それは、見える経営をする企業であること、その中で確実に利益を出していく企業であること、ルールを守り、安全を確保し、不祥事を起こさない企業であること、環境適合を重視する企業であること等であります。

そして、我々は、そのいずれについても、これまでも地道に努力してきました。そのことを自負していると思っています。ただ、これからは、こういう視点から企業を見る目が、益々厳しくなって来て、それに応える企業が高く評価されるようになります。適切に対応して行きたいと思っています。

昨年の株主総会で、この近辺に住んでおられると思われる株主から、工場の周りに街灯を設置したことなどを取り上げて、東邦チタニウムの地域貢献を評価する発言がありました。高品質、低価格の商品を供給できる企業が成長することはいつの時代も変わりませんが、それに加えて、今は社会に貢献する企業

像が求められます。

北九州EB工場は、チタンのリサイクルによる省エネ、省資源を実現する環境対応の工場です。茅ヶ崎では、安全確保、地域環境保全に最優先して取り組み、21世紀の代表的な都市型工場を目指します。製造業本来の技術の伝承はもとよりですが、そういう面での意識も皆で共有して、自信を持って、東邦チタニウムグループの拡大、発展に取り組んで行きましょう。

さて、本日はやや気負ったことを申し上げたかもしれませんが。この正月、多くの先輩や知人から、わが社の好調に触れた年賀状をもらいましたが、その中に、良い時こそ悪い時の備えを怠らないことが大事です、とか、丁寧に仕事を進めて下さい、とかの助言を添えてありました。それらは私自身の気の緩みを戒めるものとして、心して読みました。

最後は、やはり健康と安全というごく当たり前のことで締めたいと思います。今年1年、健康と安全にはお互い十分注意しましょう。それがすべての出発点です。

会社にとっても、皆さんにとってもいい年でありますよう心から祈念して、新年の挨拶といたします。

以 上